

Ⅱ－２ 中学部の実践

Ⅱ－２ 中学部の実践

１. はじめに

（１）中学部で目指す生徒の姿

児童生徒が、その子らしく精一杯生きる力を育てることを目指す本校の教育において、中学部では「集団の中で、他者を認めつつ、自分らしさや持っている力を発揮する」姿を目指して、学校生活全体を通して、人との関わりを大切にしながら学習活動を進めている。

小学部段階では、「自分の好きなことや得意なことに気づく」ことを目指して学習を行ってきた。そこで中学部では、自分だけでなく他者にも目を向け「集団の中で、他者を認める」事を大切にしたいと考えた。具体的には友達のよさや得意なことに気づくこと、困っていることに気づき助け合おうとする気持ちになること、また友だちとの考えの相違に気づき、自分の考えを見つめなおそうとすることなどである。これらのことは社会的・職業的自立に向けて人間関係を形成するうえで大切な力につながっていき、「自分らしさや持っている力を発揮する」ことは、人として豊かな生活を送ることにつながっていくことが期待できる。

（２）中学部研究テーマ「自分や他者に気づく」を設定するにいたった経緯

国立教育政策研究所は、中学生段階のキャリア教育のキャッチフレーズとして、「自分と社会をつなぎ、未来を拓くキャリア教育」と示している。そこで中学部では「自分と社会をつなぐ」ために３年間の学びの中で「社会とのつながりを持ちたい」という気持ちを育てることが大切であると考えた。

社会とのつながりを持つためには、まずは自分以外の他者の存在を意識することが大切である。

（１）でも述べたが、他者の存在を意識し他者を認めていくことが、自分と社会をつなぐことに結びつき、そのことが社会的・職業的自立を指向することにつながると考え、中学部研究テーマを「自分や他者に気づく」と設定した。

（３）今年度の取組

１学期には作業製品の販売活動を通して、小学部や保護者、外部の人たちと関わる活動を行い、相手（お客様）を意識した言葉かけや表情を考えて行動し喜ばれる経験を積むことができた。さらに２学期以降は、保育園の園児やデイサービスの高齢者との交流の場を設定することで、相手（園児や高齢者）の気持ちになって考えようとしたり、自分がしたことに対して相手が喜ぶことで自己有用感を得たりすることが期待できる。それらの取組が中学部の生徒にとっての社会的・職業的自立を指向し育ちと学びのプロセスを大切にする授業づくりにつながると考えた。

その際に、次の３つの力を育てていきたい。

【自分を知る(自己理解)】

- ・自分ができることや苦手なことに気づく

【人の役に立っていると実感する（自己有用感）】

- ・自分がしたことを他に認められ、喜んでもらえる経験をする

【他者を意識する(他者意識)】

- ・今までは視点が「自分」に向いていたが、相手を意識したり相手の視点に立ったりして考える

上記の３つの力を大切にして授業づくりを行っていく中で、特に振り返りに重点を置き、生徒の真の思いを引き出すための手立てについて検討を重ねた。

2. 中学部「地域の保育園の子どもたちと交流しよう」

(1) 単元を設定するにあたって

①単元前の中学部生徒の実態

本校の中学部は、1年生7人、2年生4人、3年生6人で構成されている。生徒は、男子が14名、女子が3名である。普段から、積極的に友だちや教師とコミュニケーションをとる生徒から、ほとんどとらない生徒まで実態は様々である。多くの生徒は、関わりの経験が少ない他者とのコミュニケーションに不安を感じており、家族や教師など慣れた人とのコミュニケーションを求めることが多い。また、友だちに用事があるときも、教師を介してコミュニケーションをとろうとする生徒もいる。また、中にはそれぞれに自分の思いや考えがあるが、相手のことを考えずに自分のことだけを主張する生徒もおり、その伝え方に課題がある。

1学期の総合的な学習の時間では、作業学習で製品化しているポップコーンの販売をした。その際、衛生や接客のことにに関して、お客さんの気持ちになって考え、お客さんに喜んでもらう経験をした。その際生徒たちは、お客さんに喜んでもらって「嬉しい」という経験をした。1学期の総合的な学習の時間は、校内に来校してくれたお客さんに対しての活動であったが、生徒が学校周辺の地域へ出て活動することはほとんどなかった。特に、自分たちと異なる年代の人と関わる経験は、家族以外では少ない。

また、生徒たちは自分の本当の気持ちや感情を表出することが少ない。その理由として、気持ちを表現する言葉の知識が少なかったり、今までの振り返りの活動が生徒の気持ちを表現する機会として十分ではなかったりしたことが考えられる。そのため、中学部ではさまざまな場面で振り返りをしてきたが、活動を通して「どう思ったか？」や「どう感じたか？」の問いでは、「楽しかった」の決まった答えになってしまうことが多かった。生徒が活動の振り返りを通して、どのように感じたりどのように思ったりしたか気持ちを表現できるようになれば、生徒の生活がより豊かになるのではないかと考え、本単元の中では、振り返りの活動についても重視した。

②単元を通して、生徒に伝えたいことと育てたいこと

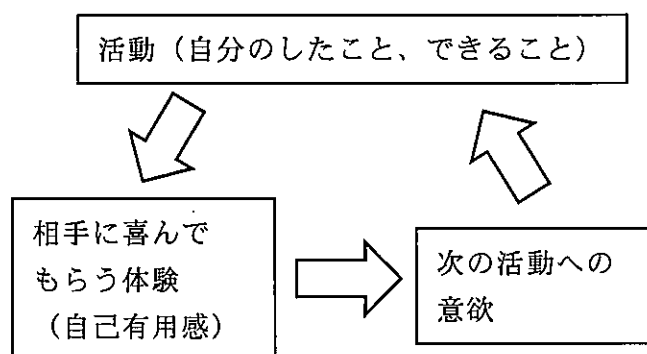
- ・地域のいろいろな人と関わる楽しさを感じる
- ・相手のことを考えて、行動したり発言したりすること
- ・自分のできること、得意なこと、苦手なことなどに気づくこと
- ・自分たちのしたことで相手に喜んでもらい、自己有用感を感じる
- ・自分の気持ちを表現できる力を育むこと

→これらの力を育むために、「地域との交流」を単元として設定した。

※1学期の総合的な学習の時間では、校内での販売活動という設定された場面の中で人と関わってきた。本単元では、生徒たち自身が考えたり行動したりしていく場面を設定することで、自分たちの気持ちを引き出したり、相手のことを考えて発言したり行動したりする力が育まれると考えた。

③生徒の社会的・職業的自立を指向するために

生徒が、自分のしたことで人に喜んでもらうという成功体験を通し、自己有用感を得る。その自己有用感が、次の活動への意欲になると考えられる。(図Ⅱ－２－１)
このような循環ができるような授業づくりを行った。



（２）単元中の授業づくりについて

(図Ⅱ－２－１)

①授業で取り扱う活動と活動設定の理由

- ・生徒たちが、学校周辺の地域や人々に気づくことができるように、地域を散策したり、どんなお店や施設があるか知る学習を行う。
- ・小さい子どもたちは、喜怒哀楽が表情などからわかりやすい（生徒に伝わりやすい）と考えられるので、生徒たちが会ったことがあり、興味を持ちやすい近隣の保育園の園児と交流する。
- ・本校の生徒が一緒に楽しんだり、相手に伝えたりすることができるように、本校の生徒が得意だったり好きだったりするゲームを交流の手段とする。

②単元全体を通しての環境設定

- ・集団を２つのグループに分けることで小さくし、各々の生徒が活動に参加できるようにする。
- ・生徒の実態をもとに、本時の活動とめあてを大きく３つのグループに分けて設定する。

③授業を通して、生徒が自分の活動や気持ちを表現するための振り返りの方法

振り返りの活動は、体験したことの意味や価値を理解し、次の経験につなげるものとして大切であると考えられる。そのため、中学部では生徒にとって意味のある振り返りの活動を大切にしたいと考えた。１学期の総合的な学習の時間では、学校公開でポップコーンを販売した。販売ではそれぞれの役割があり、自分でめあてを設定して活動した。販売活動の翌週にビデオを見ながら、めあてに対して自分たちの活動がどうであったかの振り返りを行った。その際は、ビデオに注目できず眠ってしまう様子や、ビデオでは自分の活動がどうであったかしっかりと振り返ることが難しい様子が見られた。その原因として①ビデオであっても一週間たった活動では、振り返りをするにあたって忘れてしまっていることがあること②ビデオでは、いろいろな刺激があり見るポイントを絞ることができないことが原因であると考えた。そこで、本単元では振り返りの手段として、ビデオを見ることに加えて、ポイントを絞った活動の写真を見ての振り返り、ワークシートの問いに対して選んだり記述したりする振り返り、自由に考えや気持ちを話す振り返りの４つの方法で振り返りを試した。

④交流活動をするにあたって予想した生徒の姿

- ・どのように園児と関わればよいかわからない。
- ・保育園の子どもたちの具体的なイメージがわからず、不安になる。
- ・交流というと抽象的だが、ゲームというツールがあれば、お姉さんやお兄さんの立場で園児に関わることができる生徒もいる。

表Ⅱ-2-1 生徒の実態をもとに分けた3グループのめあて

Aグループ（4人）	Bグループ（9人）	Cグループ（4人）
<ul style="list-style-type: none"> 言葉でのコミュニケーションが可能である。 普段から、友だちと関わりを持つことができる。 自分の気持ちや考えを、自分の言葉で伝えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 簡単な言葉でのコミュニケーションができる。 慣れていない人とのコミュニケーションは、得意ではない。 自分の気持ちを十分に伝える経験が少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> 言葉でのコミュニケーションが難しい生徒が多い。 教師と関わりを持つ生徒もいるが、友だちと関わりを持つことは少ない。

表Ⅱ-2-2 単元の実施記録（総時数15時間）

小題材	実施内容	生徒のめあて		
		Aグループ	Bグループ	Cグループ
第一次（1時） 学校の周辺を知ろう	<ul style="list-style-type: none"> 学校の周りを探索して、周辺の施設やお店の写真を撮る。 施設やお店には、どんな人がいるか考える。 	地域の施設やどんな人があるかわかる。	地域の施設やどんな人があるかわかる。	地域の施設やお店を見る。
第二次（5時） 保育園の子どもたちと交流しよう1	<ul style="list-style-type: none"> 交流でゲームを考える。 ゲームの準備をする。 保育園の子どもたちとゲームを通して、交流をする。 交流をして自分がどんな気持ちになったか、保育園の子どもたちはどんな様子だったか考える。 	考えたインタビューを保育園の先生に聞くことができる。	保育園の子どもたちが、どんなことをして遊んでいるか知る。	保育園の子どもたちと一緒に遊び、その場で活動する。
第三次（1時） 1回目の交流を振り返ろう	<ul style="list-style-type: none"> 交流を振り返って、自分がどんな活動をしたか振り返る。 2回目の交流に向けて、どんな気持ちか考える。 	次回の交流に関して、自分の意見や気持ちを理由を含めて表現する。	次回の交流に関して、自分の意見や気持ちを伝えたり選んだりする。	交流の写真に注目し、交流を振り返る。
第四次（6時） 保育園の子どもたちと交流しよう2	<ul style="list-style-type: none"> 保育園の交流でゲームを考える。 ゲームの準備をする。 保育園の子どもたちとゲームを通して、交流をする。 ゲームでの係り（司会、タイマー、かごの集配、スコップの集配、一緒に遊ぶの各係り）の仕事を通して、保育園の子どもたちと関わる。 	周りの状況を見て、行動したり発言したりすることができる。	周りの仕事を通して、相手と関わることをできる。	教師と一緒に、ゲームの係りに取り組むことができる。
第五次（2時） 保育園の子どもたちとの交流を振り返ろう	<ul style="list-style-type: none"> 交流を振り返って、自分がどんな活動をしたか振り返る。 交流をしてみて、自分がわかったことや自分の気持ちを考える。 交流を通して自分たちがしたこと、保育園の子どもたちがどんな気持ちになったか考える。 	交流での自分の活動や、自分の気持ち、園児の気持ちを振り返ることができる。	交流での自分の活動や、自分の気持ちを振り返ることができる。	交流での自分の活動を振り返る。

※生徒のめあては、それぞれのグループのある授業の1時間のめあてであり、それらのめあてをもとに個々の具体的な評価基準を設定して授業に取り組んだ。

⑤生徒の内面の読み取りと推察を通しての授業づくりの過程

本実践では、Aグループ、Bグループ、Cグループの生徒のうち、内面の変容が顕著であるBグループのB男について、内面を推察しながら授業づくりをしていった過程を示した。

【B男の実態】

- ・簡単な言葉でのコミュニケーションができる。
- ・普段から、友だちに優しく接することが多く、コミュニケーションをとることが好きである。
- ・活動に不安があると、消極的になる。
- ・校外に出る交流は初めてである。

表Ⅱ-2-3 内面の推察と授業づくりの過程（抜粋）

活動内容	B男の発言や行動と教師の内面の推察	内面の推察を受けての授業づくり
保育園の見学	<ul style="list-style-type: none"> ・園児に近づこうとせず、離れている。 ・帰校して「(園児たちは)かわかったよ」 <p>⇒初めての子どもは苦手かもしれないが、B男は「かわいい」と言っているので、関わりたい気持ちもあると考えられる。B男は園児との関わり方がわからないと考えられる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・B男も楽しめるゲームで交流をしたら、いっしょに遊んで関わるができるのではないかな。 ・B男が、園児と一緒に遊ぶゲームを考える。
一回目の交流の遊びを考える	<ul style="list-style-type: none"> ・園児が楽しいと思う遊びについて尋ねると曇った表情で「難しい」と答える。 ・全体的に曇った表情をしていたが、いくつかゲームを提示すると魚釣りゲームを選んだ。 <p>⇒交流活動や園児へのイメージが持てず、不安であると考えられる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・B男自身がゲームのルールを理解し、思いっきり楽しめるように、みんなでゲームの準備をしたり、交流の前にゲームで遊んだりしてみる。 ・ゲームのルールを通して、交流のイメージが持てたら、一回目の交流は、教師が特に指示をせず、B男の様子を見てみる。自分から園児と遊んだり関わったりするのではないかな。
第一回保育園との交流	<ul style="list-style-type: none"> ・最初は魚釣りゲームをしていたが、園児がゲームを始めると、やめて園児の様子を見ており、教師の声かけでゲームの手伝いをする。 ・園児から「(さおが)絡まったからなおして」と声をかけられると、「からまったんか」と言って直そうとする。 ・活動中ステージに座り、「交流ってこんなんか」とつぶやく。 <p>⇒B男は、実際に交流をしてみて、自分が思っているより楽しく、難しくないと感じたようである。</p> <p>B男は、自己有用感を感じているので、次の交流に向けてどんな活動がしたいか、考えることができるかもしれない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2回目の交流に向けて、やりたい遊びを考える。そのときの教師の支援として、自分が楽しいだけでなく、園児も楽しめるものという視点で考えられるような発問をしていく。

活動 内容	B 男の発言や行動と教師の内面の推察	内面の推察を受けての授業づくり
振り返りと二回目の交流に向けて	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が、もう一回保育園との交流へ行くと伝えると、笑顔になり友だちと顔を見合わせる。 ・保育園の園児とやってみたいことや遊びたいことを聞くと「魚釣り」と「ボウリング」と答えた。教師が、「なぜボウリングなの」と聞くと、「楽しいと思います」と答えた。 <p>⇒B 男は、交流に対して最初は不安感を持っていたが、1 回目の交流を経験して不安がなくなっていると考えられる。</p> <p>次回の交流も楽しいことをしたいと考えている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒は、次回の交流に向けて考えたゲームを、みんなに説明する。また、今回「楽しいと思うから」とゲームを考えたが、誰が楽しいと思うからゲームをしたいのか？教師が発問してみる。
二回目の交流の遊びを考える	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに 2 つ書いた「魚釣り」「ボウリング」の中からしたい方で「魚釣り」を選んだ。 ・「なんで魚釣りゲームを選んだの？」の問いに「保育園の子が楽しいと思うからです」と答える。 <p>⇒以前は園児の視点で遊びを考えることはできなかったが、今回は「保育園の子が楽しいから」という考えを話したので、B 男が園児を意識し園児の気持ちになって考える様子が見られた。</p> <p>1 回目の交流で、保育園の子どもたちは魚釣りを楽しんでもくれたという経験から、今回もさかなつりを提案したと考えられる。</p> <p>あまり自分から園児に関わることができなかったのは、ただゲームがあるだけでは、どうやって関わったらよいかわからなかったと考えられる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の交流では、ゲームの中で係りを設定して、係りの活動を通して、保育園の子どもたちと関わられるようにする
感想 第二回保育園との交流と	<ul style="list-style-type: none"> ・園児に貝探しゲーム用のスコップをどうぞとやさしく渡す。 ・園児をにこにこ見つめたり、一瞬声を掛けることがあった。 <p>⇒係りの仕事を通して園児と直接関わることができた。「交流は楽しかった。保育園の子どもたちはゲームが楽しそうだった」という感想から自己有用感や達成感を感じていたと考えられる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートで自分の活動や気持ち、園児の気持ちを振り返ったり考えたりする。
ワークシートでの振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りシートで、保育園の交流はどうだったかの質問に「うれしかった」を選んだので、何がうれしかったかを尋ねると「保育園の子どもが喜んでいた」と書いた。 ・保育園の子はどう思っているかの質問に、「よろこんでいた」を選んだので、何をよろこんでいたかを尋ねると「貝探しが喜んでくれた。」「子どもたちは楽しんでいた。」と答えていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2 回の交流を通して、交流に対する不安がなくなり、自ら活動することが増えた。3 学期の交流は、今回の経験や知識をもとに、意欲的に交流に参加することができると考えられる。

B 男は、本校に入学してからの芋苗植えや合宿など、初めての体験には参加できなかったり、何日も前から気分が沈んでしまったりすることがあった。今回も、初め保育園の園児と交流すると聞いて、交流や園児へのイメージが持てず不安があった。しかし、普段から妹や小学部の友だちなどと積極的に関わる様子が見られ、それらの背景から園児をかわいいと思い、関わってみたいという気持ちがあると推察した。B 男が、交流の内容にイメージを持てたり、園児と一緒に遊んで関わるができるように、生徒たちでゲームを考えたり準備をしたり、遊んでみたりすることにした。1 回目の交流では、自ら園児と関わろうとすることはほとんどなかったが、園児からのお願いに応えたり、教師の促しを通してゲームの手伝いをする様子が見られた。この 1 回目の活動が、交流の既有知識となり、自己有用感へと変わっていった。2 回目の交流の話を教師から聞くと、不安ではなく「行きたい!」といった期待の様子を見せていた。2 回目の交流に向けての準備では、園児が楽しめるという視点でゲームを考える様子も見られた。2 回目の交流では、園児とより関わるができるように、園児にゲームで使うスコップを渡したり、記録の枚数を書いた紙を渡したりする係りを担うことにした。交流では、園児に「どうぞ」と物を渡したり、やさしく声を掛けたりする姿が見られた。2 回の交流を経て、園児と遊んだり関わったりすることは楽しいということ、自分がしたこと喜んでもらえて嬉しいということを感じたと推察できる。

B 男は初め不安に感じながらも、少しずつ活動内容や意味を理解し、自ら取り組むことができた。このように、少しずつでも新しいことに挑戦したり、初めての人にも関わってみようとする力を育むことは、今後彼の経験や知識を広めたり、社会とつながっていくうえで、とても大切であると考えられる。

(3) 評価と考察

①学習活動や環境の設定、教材について

中学部全体で行った総合的な学習の時間であったが、様々な実態の生徒がいる縦割りのグループは、生徒が互いの活動を知ったり、自己評価が難しい生徒に、他の生徒が、頑張っていたことやよかったところを話すうえで、有効であった。A グループの生徒が、他の友だちの様子を気遣い、助けたり譲り合ったりする様子も見られた。また、活動に率先して取り組む 3 年生の姿は、1・2 年生の生徒達にとって見本となり、意欲を引き出すうえでも有効であった。

今回の単元では、中学部研究テーマ「自分や他者に気づく」を大切にしながら、実態別に大きく 3 つの目標を設定した。どの生徒も活動に取り組むことができるように、実態に応じた目標や活動内容を設定することを全ての教師が意識し、活動に主体的に取り組む生徒の姿も多く見られた。しかし、言葉でのコミュニケーションができる生徒に偏った授業になってしまったこともあり、支援が必要な生徒への活動に対して、わかりやすい授業づくりや支援については不十分であった。

校外の人と交流する活動は、相手のことを考えたり自己有用感を得るための活動として、有効であった。支援が多く必要な生徒にとっての交流のあり方としては、複数回その場所を訪れ、相手と同じ場所で過ごしていく中で、同じ場を共感できるようになってきた。2 学期の後半には、総合的な学習の時間以外にも地域へ出て活動する学習を設定したが、生徒たちは不安な様子を見せることなく意欲的に活動に取り組むことができた。

また、交流のツールとして、生徒たち自身も好きであったり楽しんだりすることができるゲー

ムを用いたのは、生徒が活動への見通しを持って交流に参加するうえで、有効であった。ただ、生徒達の既有知識や経験として、遊びに関する事柄があまり多くなく、生徒たちから交流でどんな遊びをしたいか聞き出すときに、難しさを感じた。学校生活の授業や休み時間など様々な場面で、教師がいろいろな遊びを提供し、生徒たちに遊びの知識や経験を積むことが大切と感じた。

②内面の推察を妥当に行い、授業に反映させることができたか

本単元の授業づくりでは、授業が終了した後に、各教員が担当生徒の授業づくりシートの記入と内面の推察を行った。そして、後日の研究会で、事前に記入しておいた授業づくりシートをもとにビデオを見ながら、全教員で内面の推察の確認を行った。

授業づくりシートを使うことで、今まで以上に、教師が生徒の言動や行動に注目するようになった。また、教師の色々な意見をもとに、多面的に生徒の内面の推察を行ったり、推察内容を教師間で共通理解することができた。

このようにして授業を作ってきたが、授業の生徒数が多いこともあり、全員分を時間内に推察するのは難しかった。また、繰り返しの授業ではなく、授業が次々と展開していくので、シートで推察した内面を実際に確認することが難しかった。生徒達自身が活動を振り返って評価し、改善案を考えて次の授業に活かすなど、繰り返してできる授業を展開できることが望ましい。

③学習活動を通して、生徒の内面にどのような変化がみられたか

交流の単元に取り組む前は、交流に対して「楽しみ」「不安」など、生徒によって様々な気持ちがあった。また、初めは保育園の園児たちがどんな子どもたちか、どんなことが好きか考えることが難しかった。しかし、園児の様子を見学したり、一緒に交流したりする中で、園児がよく遊ぶことや好きなものを知ることができた。自分が見たり経験したりして得た知識で、園児の立場で遊びを考えたり、園児の気持ちを考えたりすることが増えてきた。1回目の交流では不安な様子を見せていた生徒も、交流での体験をもとに、2回目の交流に向けて自分で意見を考えたり、自ら主体的に活動に参加したりする様子が見られるようになった。また、2回の交流を通して、自分たちがしたこと園児が喜んでくれて嬉しいという有用感を感じ、自分がどう考えるかだけでなく相手がどう考えているかという視点が、生徒の中に育まれてきた。

当初は、園児と同じ場にいることが難しかったCグループの生徒も、交流を複数回重ねるにつれ、保育園という場所や園児のことを少しずつ認識し、同じ場で同じ活動を共有することができるようになった。

④振り返りの活動について

ア. 自分たちが活動したビデオを見て

1学期の総合的な学習の時間では、学校公開週間の期間中にポップコーンを販売した。販売では、自分でめあてを設定して活動し、その翌週にビデオを見ながら、めあてに対して自分たちの活動がどうであったかの振り返りを行った。その際は、ビデオに注目できず眠ってしまう生徒やビデオでは自分の活動がどうであったかしっかりと振り返ることが難しい様子が見られた。その原因の一つとして、ビデオではいろいろな刺激があり見るポイントを絞ることができないのではないかと考えた。そこで2学期は、振り返りで動画を使う際に、教師が動画の中でも見せたい部分を絞って提示することにした。そして、必要に応じて動画を止めて静止画にし、教師が見せた

い場面とその前後の場面がつながるようにした。この方法は、生徒が活動全体を捉え、その中でも注目して考えるべき場面がわかりやすかった。

また、1学期と同じように動画のポイントを絞らずに提示しても、1学期の販売の動画より、本単元の交流の動画は、しっかりと見るが多かった。その理由として、遊んでいる時の園児はどんな気持ちだったのかという興味が生徒の中であったことや、振り返りという言葉が教師が使わなかったことで、生徒がリラックスして画面に注目できたことが考えられる。

イ. 写真を用いて、そのときの自分の気持ちや相手（保育園児）の気持ちを考える活動

活動の写真を切り貼りして、掲示物や自分の振り返りシートを作成した。写真をみながら、①自分はどんな活動をしていたか②自分はどんな気持ちであったか③相手は、どんな気持ちかをワークシートや吹き出しに書いて考える活動を行った。この方法では、自分はどんな活動をしていたか振り返ることができた。また、その活動をしているときに、自分の気持ちはどうであったか（やったー！できた！など）を言葉に書いて表現する生徒もいた。一部の生徒については、園児が笑顔で喜んでいるのがわかったり、園児はこんなことを思っているのではないかと考えて吹き出しに書く生徒もいた。

ウ. ワークシートを使って、自分の気持ちを表現する活動

保育園との交流を終えた当日に、生徒たちに自分の気持ちと相手の様子や気持ちを振り返る活動を行った。振り返りのワークシートは、自由に記述できるものと気持ちを選ぶものの2種類を用意した。

生徒は自分の気持ちを表出するときに、普段から「たのしかった」や「うれしかった」「よかった」などの肯定的な意見を選ぶことが多かった。しかし、このワークシートを書くにあたって、教師は「うれしかった」や「たのしかった」でなくても、どんな気持ちを選んでもいいと事前に伝えた。教師は、肯定的な気持ちを生徒に誘導するのではなく、「このときどう思った？」など生徒の本当の気持ちを引き出すような支援を大事にした。

ワークシートを使ってみて、生徒は、じっくり選択肢の中から自分の気持ちを選んでいった。また、自由記述でも、保育園の友達が喜んでいたり自分が嬉しい気持ちになったことを自由に記述していた。

B 男の振り返りシートより

保育園児の写真を貼って、自分のワークシート

① 自分が保育園児と交流したとき、どんな気持ちでいましたか？

② 自分が保育園児と交流したとき、相手はどんな気持ちでいましたか？

③ 自分が保育園児と交流したとき、相手はどんなことをしていましたか？

さかきつぼみちゃん

1 回目の交流を終えて

保育園児の写真を貼って、自分のワークシート

① 自分が保育園児と交流したとき、どんな気持ちでいましたか？

② 自分が保育園児と交流したとき、相手はどんな気持ちでいましたか？

③ 自分が保育園児と交流したとき、相手はどんなことをしていましたか？

かいさけしちゃん

2 回目の交流を終えて

保育園児の写真を貼って、自分のワークシート

① 自分が保育園児と交流したとき、どんな気持ちでいましたか？

② 自分が保育園児と交流したとき、相手はどんな気持ちでいましたか？

③ 自分が保育園児と交流したとき、相手はどんなことをしていましたか？

ゲームが楽しかった

エ. 自由に話しながらの振り返り

活動の後に着席し、かしこまった状態で振り返りをすると、自分の気持ちを表出できない生徒もいた。そのため、活動の後の休憩時間などで、気軽に教師や生徒が入り混じってフリートークという形式で生徒の本当の気持ちを聞きだすための振り返りを行った。友達同士で互いに質問しあったり、意見を話し合う振り返りでは、生徒がリラックスした様子で話したり、自分の本当の気持ちを話したりする様子が見られた。また、友達同士で話すことで、意見に共感したり、新たな意見を知ったりする様子が見られた。

AグループのA男は、ワークシートやかしこまった場面だと、自分の意見を話したがらないが、自由に話しながらの振り返りでは、自分の素直な気持ちを次々と表出することができた。

また、自分の気持ちを言葉で表現することが難しい生徒もあり、それらの生徒には言葉だけに頼らない振り返りの方法を考える必要がある。このように、有効な方法は生徒によって違うということから、様々な方法で振り返りを行い、生徒にとって一番有効な方法を選ぶということが大切である。

また、今後の課題として適切な振り返りをするためには、振り返りをするにあたっての生徒の言語理解や言語表現の力、自分の活動を振り返ることができる記憶や評価する基準を持っているかなど、振り返りをするためのアセスメントが必要であったと考える。

(4) 中学部研究テーマ「自分や他者に気づく」に迫ることができたか

①自分の得意なことや苦手なことに気づけたか

自分はこんなことができると気づいたと断定することはできないが、活動の中では、自分が自信をもってできる遊びや係りを選ぶことができた。また、交流では、自分たちが準備したゲームに自信を持っているようであった。

AグループのA男は、2回目の交流のあとに「子どもは苦手」と発言していた。A男は1回目の交流を成功体験として、2回目の交流を失敗体験として捉えていると考えられる。なぜ子どもが苦手かは聞き取ることはできなかったが、本人なりに失敗したくないという思いがあったのではないかと推察できる。このように、生徒が「苦手」と発言する中にも、その理由や背景があると考えられる。

②人の役に立っていると実感する（自己有用感）

交流活動では、多くの生徒が、自分たちが考え準備したゲームで保育園の子どもたちが楽しむ姿を見て、自分も嬉しくなったと感ずることができた。そう感じた理由は、保育園の子どもたちが笑顔でゲームをしているところを見たこと、交流の最後に「楽しかった!」と言ってくれたからと考えられる。自分たちがしたことによって相手（園児）が喜び、自分たちも嬉しくなったと振り返りシートで選ぶ生徒が多かった。また、もう1回交流したいという問いかけに、笑顔を見せる生徒もいた。

このように、自分たちで考え、準備をして人に提供するという活動は、自分たちが何を何のためにしているかその意味を理解し、自己有用感を感ずるうえで、有効であったと考える。

③他者を意識する

交流のゲームを考える活動では、自分が経験のある遊びの中から、自分がやりたいゲームを選ぶ生徒がいたが、2回目の交流でのゲームを考える活動では、「園児が楽しんでもくれるか」の視点でゲームを考える生徒が増えた。見学や1回目の交流を通して、園児のイメージが持てたことで、相手のことを意識し、相手の視点に立って考えることができたと推察される。交流では、紙飛行機の折り方や飛ばし方の見本を見せたり、魚つりの紐が絡まって園児が困っていたら、助けたりする様子も見られた。C男は、はじめの保育園の見学で、知らない場所での知らない人たちがいる状況に対してその場にいることができなかったが、1回目と2回目の交流では、園児と同じ場を共有することができた。

これらのことから、1回ではなく複数回同じ人と交流することで、相手を知り、意識する気持ちが育まれ、また相手のことを考えて思考したり発言したりすることができたと考えられる。また、教師が生徒への発問として、「保育園の子どもたちはどうだったかな？」や「保育園の子どもたちはどう思っているのかな？」など、相手を主語とする発問を取り入れたことが有効であったと考える。

また、交流にむけてゲームの係りの役割に取り組んだ際は、友だちの仕事の様子を気にしたり、必要に応じて友だちのことを手伝ったりする様子が見られた。このように、園児のことだけでなく、一緒にゲームを作り上げていく友だちのことも仲間として意識し、互いに助け合ったり譲りあったりするようになった。

3. まとめ

今年度の研究では、生徒が「自分や他者に気づく」ための授業づくりとして、総合的な学習の時間に焦点を当てて研究を行ってきた。1学期は「お客様に喜ばれる店作りを考える」、2学期は「園児に喜ばれる活動（あそび）を考える」というねらいを通して、生徒が自分のよさや得意なことに気づいたり、他者を意識し他者の思いに気づいたりするための授業づくりを行った。

以下に今年度行った子どもの社会的・職業的自立を指向し、育ちと学びのプロセスを大切にす授業づくりでの成果と課題について整理する。

（１）生徒と社会をつなぐ機会の保障と達成感や自己有用感を味わう体験

生徒はお客様に喜ばれる店作りとして、校内販売や他校の販売活動に参加する中で「清潔、挨拶、笑顔」が大切であることを学び、学校公開期間に外部からのお客様に向けての販売活動で、上記の３つのことを意識して接客を行った。授業後の振り返りでは、接客態度を意識して販売できたと評価する生徒が多く、販売活動を経験して接客は苦手だが、商品を準備して渡す仕事は得意であるなど、自分の得意、不得意に気づく生徒もいた。しかし、自分達の接客態度がお客様に喜ばれることにつながっているという実感を得ることは、販売活動の中だけでは難しかったため、教師はお客様の感想ビデオやアンケート結果を生徒に示した。お客様からの声を見聞きすることで、自分の接客態度がお客様に喜ばれる店作りにつながったことを実感できた様子だった。お客様からの評価を受けることが、生徒の販売活動の経験を意味付け、価値付けするうえで大切なことであることを学んだ。

一方で、一部の生徒は接客や商品を扱うなどの販売活動を主体的に行うことが難しかったことから、2学期は生徒全員が外部の人と関わるができる活動として、近隣保育園との交流活動を設定した。その際に、生徒が主体的に園児と関わるように生徒の好きな遊びの中から、園児が遊べそうなものを生徒同士で考え準備を行った。初回の交流活動では、園児たちだけで遊び始め、生徒から園児に積極的に関わる様子があまり見られなかったことから、2回目の交流では、遊びの中に司会や道具を配るなどの係りを取り入れそれを生徒が担った。そこで生徒と園児が関わる場面ができたことで、生徒は園児との関わりを通して喜ぶ様子を見たり、最後の挨拶で園児からの「楽しかった、ありがとう」の声を直接聞いたりできたことで、達成感や自己有用感を味わうことができた。

振り返りの時、交流前に交流に対して不安な気持ちを抱いていた生徒から「交流ってこんなか。たのしかった。子どもたち、かわいかった。」という感想を聞くことができた。今回の経験で『社会とつながってもいいな』という気持ちが育まれてきている。このような気持ちを多くの生徒に持ってもらうためにも、外部の人と関わる活動は達成感や自己有用感を味わうことができるような活動内容や手立て、支援を考えていく必要がある。

（２）対話を通して引き出す生徒の思い

生徒が学習で経験したことについて自分なりに意味付け、価値付けをしていくことが、「いま」という現実に向き合うことや「いま」より先の将来への関心を高めるために大切であると考え、振り返りを丁寧に行ってきた。

振り返りをワークシートで行ったときに、生徒によっては教師が期待する回答をし本当の思いを引き出すことが難しかったことから、自分の思いを素直に出してもよいという意識づくりのための教師の姿勢を含む環境設定が必要であることを学んだ。また、自分の気持ちを言語化、文字化することが難しい生徒には、普段から教師との対話の中で丁寧に生徒の思いを引き出し言語化

したり文字化したりして伝えていくようにしていきたい。さらに自分の思いを表現することが難しい生徒には、活動場面で教師が生徒の行動や表情から思いを推察し共感したことを言語化して伝えていく。その繰り返しにより自分の行動の意味付けを本人なりに行い、次の活動の際の本人の行動に現れてくると期待できる。

（３）他者意識につなげる外部の人と関わる活動

「自分や他者に気づく」ことをねらいとして、販売活動や交流活動を行ってきた。

特に交流活動で教師は、交流当日に園児の表情を見てくるように伝え、交流後の振り返りでは、ビデオ録画の映像や写真で園児の表情や様子について着目するように伝えてきた。「なぜ」「なんのために」園児の表情を見るのかを生徒が分かって交流活動を行ったとき、園児を意識するようになる。そのためには交流活動が生徒にとって「させられる」活動ではなく「主体的にする」活動であることが大切ではないかと考える。その際に生徒の「やりたいこと」ばかりではない場合があるので、友だちとの間で折り合いをつけることや、本人にとっての活動に対しての「意味付け」がより求められてくる。そのためにも本人なりの振り返りを丁寧に行っていく必要がある。

また、生徒にとって初めての人と関わる時には少なからず不安がある。その不安を軽減するためにも、外部の人と関わる活動を教師が考えるときには、生徒の今までの経験を含めた生活の全体像を捉え、何に不安を持っているのかを理解して対応し、生徒が「なぜ」「なんのために」行うのかがわかり、他者と関わって達成感や自己有用感を味わえる活動にしていきたい。

今年度の中学部の研究を行って、生徒による振り返りが自身の経験を意味付け、価値付けするために大切なことを学んだ。今後とも継続して「自分や他者に気づく」ための授業づくりを検討していきたい。

【参考文献】

1. 本校研究紀要 平成 26～28 年度
2. 菊地一文(2013)「実践キャリア教育の教科書」学研教育出版
3. 文部科学省(2011)「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育の手引き」